

[研究ノート]

ミレナ・イエセンスカーの男女観に関する一考察

——ダブルスタンダード擁護に焦点を当てて——

半田 幸子

はじめに

1919年末から執筆活動を始めたミレナ・イエセンスカー(以下、イエセンスカー¹)は、戦間期を通してジャーナリストとして活躍した。カフカが送った手紙によって、死後最初の脚光を浴びることになったイエセンスカーは、カフカの描写によってイメージづけられたように思われる。カフカはイエセンスカーに宛てた手紙のなかで、彼女を大海やメドゥーサに例えるなど²、強い女性として描写した。彼女がジャーナリストとして働く女性であった事実もそのイメージを補強したのかもしれない。その結果、ともすると当時のフェミニストの代表であるかのように誤解されることがある。とりわけ、1970年代以降のフェミニズムの潮流においては、イエセンスカーが自立した女性であったという観点から関心が寄せられた。だが、彼女が経済的、あるいは精神的に自立していたことと、フェミニストとして自己を認識していたかどうかということは、また別の話である。彼女自身は、フェミニズム活動家とは距離を置いており、フェミニストとしての意識はまったく持っていなかったといえる。とはいえ、イエセンスカーは、活動の前半にあたる1920年代は主に女性向けの記事を手掛け、記事において、新生国家における女性の啓蒙活動に対して意欲的な姿勢で取り組んでいたことを考えれば、その意味において、男女の役割に対しての何らかの意識を持っていたことは確かである。

では、彼女は女性をどのように啓蒙しようとしていたのか、どのような女性像を理想としたのだろうか。この問いは、ジェンダー論的観点から見た彼女の思想的立場を問うものと関係している。筆者は、イエセンスカーのジャーナリストとしての位置付けを大きなテーマとして研究を進めているが、そのなかにおいて、ジェンダー論的観点からの位置付けは重要な一部を占める。本稿では、その糸口として、ダブルスタンダード擁護に着目した。というのも、イエセンスカーの記者としての側面にいち早く目を向けたキャスリーン・ヘイズが、その著書³において、イエセンスカーのダブルスタンダード擁護と1929年以降の保守的な思想の否定を指摘しているからである。この指摘からは、イエセンスカーの立場がかつては保守的であったが、その後、思想的転換があったと読むことができる。

本稿では、先述の問いをこの先の研究の射程に入れ、イエセンスカーの男女観のな

かでも、特に、ヘイズも指摘する彼女のダブルスタンダード擁護に注目し、彼女の記事におけるダブルスタンダード擁護をめぐって、その内容と意図について考察する。時代については、ここでは、彼女が主として女性に向けて記事を執筆した 1920 年代に絞ることとする。

本稿の構成は次の通りである。本章においてまず、イエSENSカーの男女観が先行研究においてどのように論じられてきたか、および、それに対する本稿の位置付けについて述べる。その上で、第 2 章において、彼女の男女観を考察する上で必要となる歴史的背景を確認する。さしあたって、19 世紀後半からのフェミニズム運動の歴史を概観しながら、イエSENSカーの生い立ちおよび経歴をそのなかに位置付け、彼女自身の育った家庭環境および受けた教育が女性解放運動とどのように関係していたのかを確認する。それを踏まえ、第 3 章において、彼女の 1920 年代の新聞記事を分析対象として、イエSENSカーの男女観の要点ともなるダブルスタンダード擁護の詳細を明らかにする。具体的には、ヘイズの指摘するダブルスタンダード擁護の詳細を確認し、イエSENSカーの意図について考察する。

1. 先行研究

イエSENSカー研究といえば、その多くは伝記である。カフカ文学やカフカ自身を理解する上での補足資料として、カフカ研究のなかで扱われることも多い。また、特に 1980 年代以降は、フェミニズムの隆盛とともに女性たちの存在に光を当てる研究が盛んになり、その流れのなかでイエSENSカーを取り上げるものが出てきた。

たとえば、1995 年に英国とアメリカで刊行された『プラハの女性たち』⁴は、18 世紀後半から 20 世紀までの間にプラハで活躍した著名な女性たちの伝記をまとめたものだが、このなかでイエSENSカーも取り上げられている。著者によれば、1987 年にプロジェクトを開始したという。研究のきっかけは、歴史を政治や経済からだけではなく、社会および文化の側面から捉え直すことの重要性が認識され始め、それまで歴史研究に欠けていた女性の存在や視点に目を向けたことにあった⁵。そのなかで、独立したばかりの国家でジャーナリストとして活躍したイエSENSカーは、カフカからの手紙ですでに名前も知られており、対象として取り上げやすかったのだろう。これらの研究は、それまでの「カフカの恋人」としてばかりだったイエSENSカー像に、異なる視点すなわち「自立した女性」像を加えた点で大きな成果をもたらしたが、研究のなかで語られた内容は、過去に蓄積された伝記のいくつかをなぞったものであった。管見の限りでは、イエSENSカーの男女観やそれに関連する視点で考察するものは、このようなジェンダー研究のなかにも見当たらない。

1980 年代半ばになってようやく、イエSENSカーのジャーナリストとしての側面にも光が当たり始めた。1984 年に西ドイツにおいてドイツ語で刊行されたドロテア・

ラインによる『すべてが人生』⁶を皮切りに、1990年代から2000年代にかけて、英語圏で1冊、チェコ本国で4冊（生前に出版されたものの再版含む）、日本でも1冊のアンソロジーが刊行された⁷。イエセンスカーの新聞記事は1000以上あるため、それらは、いずれも彼女の記事のごく一部ではあるが、アンソロジーの刊行は彼女のジャーナリストとしての側面に目が向けられ始めたことの証である。そのなかで、イギリスの研究者キャスリーン・ヘイズが、イエセンスカーの記事を英訳した『ミレナ・イエセンスカーのジャーナリズム』⁸は、序論において執筆活動の実態把握に努めている点で、特筆すべきアンソロジーである。

ヘイズはイエセンスカーのジャーナリストとしての活動をいくつかのテーマに分けてまとめている。イエセンスカーの1920年代の活躍については、「シンプルさ——内面と外見において」、「女性とファッション」、「女性の義務」という三つの項目に分けて論じている。この三つの項目においては、とりわけイエセンスカーの男女観について言及している。以下、ヘイズの論点をまとめる。指摘される論点は主に次の4点である。

- ① ファッションにおいては男性的なスタイル、すなわち装飾のないシンプルで実用的な動きやすいデザインのことを推奨した⁹。フェミニンで扱いにくい服は醜さや不自然さと結びつけ¹⁰、また、女性の社会進出とファッションや建築における装飾の排除を関連づけた¹¹。
- ② 上記の一方で、女性には、身体的な見た目に気を配る義務が男性以上にあるとし、また、女性には夫を喜ばせる義務があると説いた¹²。
- ③ 上記2点に加え、特に不貞行為に関する彼女のダブルスタンダード擁護が、当時の女性解放論者らから強い非難の対象となった¹³。
- ④ 自己犠牲を支持する一方で、女性の居場所を家庭にとどめる考えに対しては徐々に否定的になり、1929年には女性が男性の要求を満たすべきという見解は完全に否定するようになった¹⁴。

本稿では、上記4つのなかで、特に③に注目したい。この不貞行為に関するダブルスタンダード擁護は、イエセンスカーの男女観に関する見解や立場を読み解く上で重要な点だと考える。なぜなら、ダブルスタンダード擁護の内容次第で、彼女の男女観の位置付けがより明快になるからである。そこで本稿では、上記のことを念頭に置きつつ、イエセンスカーの男女観について、彼女のダブルスタンダードの内容に焦点を絞り、考察を試みる。

次章では、本題に入る前に、イエセンスカーの見解を読み解く上での背景知識として、チェコにおける1920年までのフェミニズム史、およびそのなかにおけるミレナ

の生い立ちおよび経歴について概観しておきたい。

2. チェコにおけるフェミニズム史¹⁵とイエSENSカーの略歴の概観

19世紀後半から20世紀前半にかけて、近代国家では、女性の参政権や教育、職業に関する法的権利を求めたフェミニズム運動が活発となった。チェコにおいては、フェミニズム運動は、女性解放のみならず、オーストリア帝国支配からのチェコ民族解放の一部として捉えられ、より広く社会と繋がりを持っていた¹⁶。チェコのフェミニズム運動は決して女性が男性と同等の地位を目指すといった女性に限定される運動ではなく、帝国議会議員や大学教授など、いわゆる知識階級の男性からの働きかけによるものでもあった。換言すると、それは男女の相互に対する敬意と双方の協力関係の上に成り立つものでもあったといえる¹⁷。チェコにおいて主として求められたものは、女性の参政権及び男性と同等の教育を受ける権利であった。

女性の教育を重要視した人物といえ、18世紀半ばまで遡ることができるが、ここでは、19世紀後半からの運動に目を向けたい。

19世紀後半には女性解放運動の先駆者としても知られるチェコの国民的作家ニェムツォヴァー (Božena Němcová, 1820 (1817?)–1862) もいるが、本格的な活動の始まりは、慈善活動家で収集家としても有名なナープルstek (Vojtěch Náprstek, 1826–1894) とニェムツォヴァーの影響を受けたスヴィエトラー (Karolína Světlá, 1830–1899) らが設立した、チェコ初の女性団体、アメリカ婦人クラブ (Americký klub dám, 1865–1948) にある。このクラブは、女性の支援やチャリティー、教育を目的とした団体で、設立の背景には、ナープルstekの1848年からの約10年間のアメリカ滞在がある。彼はアメリカで女性解放運動に触れ、強く影響を受けたのである。その後1871年に、アメリカ婦人クラブの設立を手伝ったスヴィエトラーが、チェコ女性生産団体 (Ženský výrobní spolek český, 1871–1972) を設立した。その会員の一人でもあり、のちに機関誌『女性新聞』Ženské listy (1874–1926) の編集者ともなったのが、詩人であり作家のクラスノホルスカー (Eliška Krásnohorská 本名 Alžběta Pechová, 1847–1926) である。

クラスノホルスカーは、あらゆる層における女性の高等教育の重要性を理解し、また、その教育が妻や母となる上で障害にならないと捉えた。彼女の功績は、中央ヨーロッパ初の女子ギムナジウム、ミネルヴァの設立にある。ミネルヴァは、1890年に設立されたが、その試みは1868年から始まっていた。約20年にわたる努力の結果、女子のギムナジウムが設立されたことによって、女子生徒の大学進学への道が開かれた¹⁸。このミネルヴァの設立が、当時のフェミニズム運動の一つの目的である女子の教育における礎となったと言える。

このミネルヴァの設立の6年後の1896年、イエSENSカーがプラハで誕生した。

当時のプラハはまだオーストリア帝国の一都市（といってもボヘミア王国の首都ではあったが）であった。彼女が3歳のときに弟ヤンが生まれるも、間もなく亡くなったため、彼女は一人娘として育った。父ヤン（Jan Jesenský, 1870–1947）は歯科医でカレル大学教授、母ミレナ（旧姓 Milena Hejzlarová, 1874–1913）は教育者の娘であった。母は体が弱く、イエセンズカーが16歳のときに病死している。母が亡くなった当時、イエセンズカーは先述のミネルヴァに通っていた。そこでは、フェミニストとしても著名な、歴史学と地理学の教授ホンザーコヴァー（Albina Honzáková, 1877–1973）を慕い、数通の手紙も送っている。したがって、イエセンズカーは、チェコにおけるフェミニズム運動の立役者やその成果に、直接的にも間接的に触れ、恩恵を受けて育った。

さて、フェミニズム運動のもう一方の主たる目的である女性の参政権の獲得は、チェコ女性クラブ（Ženský klub český, 1903–不明）および女性参政権委員会（Výbor pro volební právo žen, 1905–）による活動によって果たされた。第一次世界大戦の終結とともに誕生したチェコスロヴァキア共和国の憲法（1920年制定）において、女性の参政権も明記されたのである。この二つの団体が合流し、のちに国民女性委員会（Ženská národní rada, 1923–1942）が設立され、女性の地位向上のための活動組織としてチェコスロヴァキア第一共和国においてもっとも大きな団体となった。これらを牽引したのが、政治家、記者として活躍したプラミーンコヴァー（Františka Plamínková, 1875–1942）である。プラミーンコヴァーは、1920年代半ばから1930年頃にかけて「国際婦人連合」や「国際女性参政権同盟」などの副議長も務めるほど、国際的にも活躍した人物であるが、国内でも、国民議会の議員に当選し、また様々な媒体に記事を書くなど、広く精力的に活動していた。

以上見てきたように、チェコのフェミニズム運動は、チェコ人による民族的権利獲得の流れのなかで男性の存在が重要であったことが改めて分かるが、意外なことに、この動きに反発したのが、カトリックの女性団体を主体とする保守派層であった。このカトリックの女性たちが反発したのは、カトリックの伝統的な習慣からの逸脱、すなわち自由恋愛、離婚などといった当時「モダンな」とか「新しい」という形容詞で括られた行為であった。そのため、カトリックの保守層からすれば、「モダンな」女性というのは、カトリックの習慣を捨てた女性であって、その存在や行為は決して認められるものではなかったのである。

ここでイエセンズカーの生涯にもう一度目を向けたい。イエセンズカーは、チェコ女性クラブの設立から10年ほど経った1913年にミネルヴァを卒業した。その後、父の勧めでカレル大学医学部に進学したが、2年で退学している。退学後は、音楽学校に入学するも、それもすぐに辞め、文学カフェに出入りするようになった。そこで出会ったユダヤ人の文芸評論家ポラック（Ernst Pollack, 1886–1947）と交際するのだが、父には強く反対された。しかしながら、反対を押し切って交際（父親は彼女を精神病

院に入院させたが、最終的には関係を認めるに至った)、結婚し、1918年にウィーンへと居を移した。したがって、チェコスロヴァキアが独立し、女性が参政権を獲得したときには、イエSENSカー自身はチェコスロヴァキアにはいなかったのである。彼女はその後、夫と離婚する1924年までウィーンに滞在した。20代の前半を、敗戦後の貧しい経済状況のウィーンで過ごしたことが彼女の思想形成に及ぼした影響は小さいものではなかったことは彼女の初期の記事に見られる貧しさをテーマとするものの多さからうかがえる。と同時に、ウィーンでの家庭生活においても、男女観形成の上で重要なことが起きていた。

まず、文筆業の道を歩むようになるのは、結婚後ウィーンへ移ってからのことである。理由は、夫が働かずにカフェ浸りの生活で家庭を顧みなかったことにある。つまり、経済的に困窮し、職を得る必要が生じたのだ。父に金銭的援助を得たこともあるが、駅の荷物運びやチェコ語の家庭教師もした。そのような生活を送るなか、ミネルヴァ時代からの友人でもっとも親しかったイーロフスカ (Stáša (Stanislava) Jílovská, 1898–1955) が勤めていた『論壇』*Tribuna* (1919–1928) で翻訳の仕事を得ることができたのである¹⁹。

1919年12月末から、主にウィーンに関するエッセイを寄稿し始め、徐々に活動の幅を広げた。国民女性委員会が設立された1923年には、イエSENSカーはまだウィーンにいたが、この年に、執筆の場を『論壇』から『国民新聞』*Národní listy* (1861–1941) へと正式に移籍した。イエSENSカーがそれらの委員会とは関わりを持っていたわけではないが、同時期に一つの転換期を迎えていたのは大変興味深い。

彼女が、1920年代の活動のなかで最も華々しい活躍を見せ、ジャーナリストとしての地位を確立したのは、夫ポラックと離婚して拠点をプラハに戻した後の1925年以降だといえるだろう。当該紙での活動を基に出版された1冊のレシピ集と2冊のエッセイ集の刊行、加えてグラフ誌『鮮やかな週』*Pestrý týden* (1926–1945) 創刊への参加は、その華々しい活躍を象徴している。また、タイゲ (Karel Teige, 1900–1951) をはじめとするプラハの前衛集団「デヴィエトスィル」*Devětsil* (1920–1930) との交流が盛んだったのもこの頃で、1926年には、同グループのメンバーでもあった建築家のクレイツァル (Jaromír Krejcar, 1895–1950) と再婚した。

その後1928年頃を境に、イエSENSカーの「モード記者」としての活躍に陰りが見えた。長く勤めていた『国民新聞』に契約解除され、『人民新聞』*Lidové noviny* (1893–1945, 1988–) に移るのだが、同紙との契約も1年強で解除される事態に陥った。この背景には、クレイツァルとの間の長女ヤナ (Jana Černá, 1928–1981) の妊娠中に罹患した関節炎の痛み止めに用いたモルヒネ依存や、クレイツァルの不貞による二度目の離婚、また共産党への傾倒が大きな影響を与えた主な要因としてあげられる。

このように、彼女の活動にとって1920年代は、振り返ってみると、順風満帆な時

期（半ば）と、思うような活動ができなくなる時期（後半）との落差の大きい変化を経験した時代であった。と同時に、別の見方をすれば、ジャーナリストとしてだけでなく、妻として、母として、さまざまな役割を模索する日々を送った時代でもある。そのように、彼女のジャーナリストとしての地位確立と同時に女性としての生き方を模索するなかにおいて、イエSENSカー自身がチェコスロヴァキアの女性解放運動に身を投じることはなかったし、女性解放運動自体もまた、1919年の参政権獲得を盛り上がり頂点に落ち着いていったのである。

宗教に関して補足すると、先に挙げた、女性解放運動をめぐる論争のなかでのカトリックの立場から考えれば、父の反対を押し切って貫く自由恋愛や二度の離婚に至るイエSENSカーの一連の行動は、決して容認されるものではない。カレル大学での履修登録書の宗教欄には、イエSENSカーはカトリックと記入した。しかしながら、先に挙げた彼女の行動や彼女の記事等に宗教的な記述がほとんど見られないことを考えると、カトリックといっても慣習的なものであったと考えられる。

イエSENSカーの人生を、以上のことを鑑み、フェミニズムの歴史の中に位置付けて簡単にまとめると、彼女は、女性解放運動がもたらした恩恵を受けて青春時代を送ったが、フェミニズムとも保守的な思想とも異なる思想を持っていたといえる。

では、このような立場にいたイエSENSカーの男女観に見られるダブルスタンダードはどのように解釈することができるだろうか。次章にて、その内容を詳しく見ていきたい。

3. イエSENSカーの男女観：ダブルスタンダードを論点として

3.1. ヘイズの指摘するダブルスタンダード

イエSENSカーのダブルスタンダードについて論じるにあたって、まず、ヘイズが指摘した箇所を確認しておきたい。ヘイズは、イエSENSカーが女性の役割は生物学的な性によって決定づけられると述べ、そのあとで二つの記事を根拠としてあげている²⁰。それらはいずれも『国民新聞』に掲載されている記事で、1923年2月17日付の「女性解放に関するいくつかの非常に遅れたコメント」と同年11月22日付の「モードに当てはまらないテーマ」である。前者の記事においてヘイズが指摘している箇所は二つある。

一つは、「女性はあらゆる仕事をこなすことができるが、唯一の天職は母である」²¹という文である。もう一つは、イエSENSカーが母親および主婦としての女性の仕事を男性の仕事と同じように重要視しているという点である。これらの指摘は、一文の引用と短い説明しかなく、イエSENSカーの意図するところを理解しづらい。そこで、本稿では前後の文脈がわかるよう少し長めに引用したい。以下、下線は筆者に

よるもので、ヘイズの指摘箇所を示している。

繰り返しになりますが、この問題が当事者同士で取り上げられているのを、そこらじゅうでたびたび目にします。女性の貴重な特性の一つは、必要とされる役割を果たせるところにあります。もし女性が収入を得て、子供たちを養い、ともすれば夫をも養い、自らの分も稼ぐ必要があるとなれば、確実に、そしてきっと誠実に、粘り強く、ひょっとすると非生産的にも——収入を得て、自分と夫と子供を養うことをやり遂げるでしょう。工場の経営、自動車の運転、役所での仕事をこなすこともできますし、精神的にとてもたくましく日々の生活を生き抜くこともできます。戦時中は何万人もの女性たちがそれをやり遂げたのでありますし、もしそのようなことがまた必要となれば、いつでもやっつけてのけることができるでしょう。しかしながら、それらの雇用は、まさに雇用なのであって、女性においては——正しい女性においては——天職ではないのです。女性は、心の奥底では、神が創造した「女性（訳注：妻という意味も持つ）および母」であり続けているのです。幸運にもそれは確かに残っていくものでしょう、いわゆる女性問題のあらゆる旗印を掲げてもおお。そして、女性のなかに残り続けるそれは、女性の最大の価値なのです。²²

この文章からは、確かに女性の天職は「女性」「妻」「母」だとし、そのことの価値を最大に評価していたということがうかがえる。つまりイエSENSカーは、ヘイズの指摘に見られるように、女性という生物学的性を特別視していたのは確かなようである。また、生物学的な理由だけでなく、「神による創造」という表現が出てくることについても触れておかなければならない。これは、彼女の他の言論からいって、文化・習慣として身近に存在する「神」なのであって、信心深さからくるものとはいえない。いずれにしても、この文章だけを見れば、女性解放論者たちの反発を買うのは当然である。

次に、ヘイズが指摘するもう一つの箇所について見ておきたい。

11月22日付の記事では、イエSENSカーが男性の不貞行為と女性の不貞行為は異なる秩序のものであると述べている点をヘイズは指摘する²³。また、イエSENSカーがそう述べる理由に、女性の役割は子を産むことであり、女性は性生活においてももっとも高次元の原則を守る義務があることを挙げているとして、イエSENSカーの性の二重規範（ダブルスタンダード）擁護を指摘した²⁴。

この記事は、送り主の名が書かれていない読者からの手紙の悩み相談に対して答える形で構成され、その悩みが、読者のどの女性たちにも共通する悩みであるはずだから共有しておこうという趣旨で書かれている。その悩みとは、「夫が浮気をしていたら、

妻はどうすればよいのか」²⁵ というものであった。それに対してイエSENSカーはまず初めに、次のように前置きをしている。

世の中のあらゆるものがそうであるように、この問題も単独の問題ではありません。一般的で表面的な規範のいわゆるモラルや誠実というものを私は信じておりません。^①心の数だけ能力があり、罪の数だけ痛みがあるのです。^①私は決して——人間に対する尊敬心から——こうする必要があると、こうしなければならないとか言うことはしません。しかしながら、このことは、あらゆる事案に共通することであり、あらゆる女性にとって共通することです。²⁶

つまり、まず大前提として、イエSENSカーは本来、さまざまな事案を一般論として扱うことには慎重である点がかがえる。しかし、夫の浮気という問題に関しては、女性同士で共有できる部分があるために、意見を述べる気になったというのである。ではその意見はどのようなものであったのだろうか。ヘイズは、「男女の浮気は別のものである」「女性の役割は子供を生むこと」という点を指摘しているが、ここではその文の後まで引用し、文脈を確かめておきたい。以下、下線の一重線は、ヘイズの指摘箇所、二重線は筆者が後に指摘する箇所を示したものである。

まず第一に、私の考えでは、女性の浮気と男性の浮気は——言ってみれば——同じレベルの罪ではないことを認識する必要があるのだと思います。男女は生理学的に異なります。つまり、女性は自らの性生活に対して、男性とは異なる義務、異なる責任を負っているものであり、女性は母になることが可能です。母であることは女性の使命であり課題でもあります。女性の母性は、そうすることが困難な場所であっても性生活の潔癖さや正直さの義務を女性に与えています。男性は縛られず自由です。つまり、生理学的に。男性にとって性生活は、喜び、義務、苦勞の混ざったものであることを意味しないのです。男性にとって性生活は、享樂というだけであり、享樂である限りにおいては、ある程度はそれを必要とするものなのです。私が言いたいことはただ、^②女性側には深刻な生理学的影響があるばかりの行動が、男性にとっては生理学的に拘束されるものではないということです。これは決定的な違いです。

私は、^③浮気を擁護する気はまったくありません。^④夫婦は、まさに貞節で結ばれる場合にのみ意味を持つものです。貞節とは単に潔癖を指すのではなく、貞節とは性のプライベートを守ることであり、^⑤もっとも近い結びつきのもっとも高い次元の友情のことを指すのです。[…]^⑥寛容な笑顔や忍耐はあなたの夫をその恋心から早々に目覚めさせてくれるでしょう。悲劇的な身振り、芝居、非難

叱責、脅しは、事を大きくしてしまうことがあります。夫を非難すること——そのこと——唯一そのことを——許す男性は皆無でしょう。²⁷

ヘイズは、引用冒頭の下線部（一重線）の点をダブルスタンダードだと指摘している。確かに、一見してイエSENSカーの議論は刺激の強いものであり、男女に対する偏見やステレオタイプも含まれている。現代においても女性からだけでなく男性からも強い批判や反発が予想され、大きな議論を呼ぶものといえる。ヘイズの指摘はもっともである。これは、ダブルスタンダードだという理由は明らかである。それについては議論の余地はない。しかしながら、筆者は、別の視点からイエSENSカーの意図を探りたい。次の節で考察を試みる。

3.2. イエSENSカーの意図

筆者は、先の引用二つにおいて二重線で示した①から⑥の点に注目したい。

まず、イエSENSカーは①のように、物ごととは何ごとにも個々の事情や背景、状況が異なるため、一般化して語ることは通常好んでいないことを前置きとして断っている。この点において、イエSENSカーは個々の事情の背景を知ることの大切さを踏まえており、ある事例がすべてに当てはまるわけではないという認識は持っているといえる。それにも関わらず、この問題を取り上げるのは、夫の浮気が悩みとして女性に共有されうるものであるからと述べている。この問題が当時の女性たちの間で大きな悩みとなっていたことがわかる。その悩みに対する答えを探すなかで、イエSENSカーの考えが至ったところが、②に示されるように、男性と女性では生理学的に異なるというものなのであろう。この点について、当時のフェミニズム的観点との検証を行わなければならないが、この先の課題としておきたい。ここでは、イエSENSカーの意図に集中したい。②は、イエSENSカーの意図するところの一過程であり、これが結論ではない。つまり、イエSENSカーは男女の生理学的差異を認め受け入れるところから議論を始めているのである。

イエSENSカー自身、③のように、浮気を擁護する気はないと述べている。これは、女性解放論者らからの自己防衛などではなく、本心で述べているはずである。イエSENSカーの経歴でも述べたように、当時のイエSENSカー自身が、ウィーンという自らの育った環境と言葉も文化も異なる土地において夫の浮気に悩まされていたからである。そのことを考えれば、浮気を擁護する気がないのは本音といえるであろう。筆者は、イエSENSカーの意図は、④から⑥にあると考えている。

④と⑤から分かるように、大前提として夫婦が互いに対して誠実であり、互いの信頼関係が構築されていることがイエSENSカーのなかでもっとも重要なことであった。また、夫婦間や男女間の友情はイエSENSカーが特に重視していた価値観の一つ

であり、このことは、繰り返し別の記事でも述べられている²⁸。③に記しているように浮気は許されるものではない。しかし、もし夫婦関係を続けるのであれば、浮気をした夫との信頼関係を構築し直すことが重要であると考えていたことは、④と⑤で明らかであろう。そして、このことを伝えるためには、男女の生理学的差異を認めるところを出発点としなければならなかったのである。それが、ヘイズの指摘するダブルスタンダードであり、女性解放論者からの批判の的となった言説である。

男女の浮気は別のものであるという言説をそのまま受け取れば、それはダブルスタンダードだといえるだろうが、男性の浮気は許されるが女性は許されないということを描いたものではない。もっとも、まるで女性が浮気することは前提にはしておらず、男性のみの浮気の話に終始しているという批判もあるだろう。

しかしながらイエSENSカー自身は、この問題の論点を男女平等の話には持ち込んでいないのである。夫婦関係を上手くするためには、どうすればいいかという事を考えた結果の話である。目の前で起こった現実をどのように受け入れ、それに対してどのように対処するのが良いかということについて、自分自身の現在進行形の経験も重ねながら、現実的に考えて出した結論が、男女の生理学的差異を受け入れることだったのではないだろうか。そして、その考えの具体的な行動が、夫を咎めるのではなく、寛容な笑顔で迎え入れ、忍耐するということだったのである。このことは、イエSENSカーの翌年1月の記事において彼女自身も説明している。記事のなかでまず、驚愕した女性たちから多くの手紙を受け取ったことを伝えている。おそらく批判の声が大きかったのであろう。イエSENSカーが伝えるそれらの内容は、簡潔にまとめると「どうしたら私〔訳注：イエSENSカー〕はそのようなこと〔訳注：浮気〕を弁明することができるのでしょうか」²⁹というものであった。それに対して、イエSENSカーは次のように反論している。

そうですね、私は誰のことも弁明しておりませんし、誰のことも非難しておりません。それはまさにこういうことです。^⑦つまり、批判についての話をしているのではなく、現実についての話をしているのです。 真実や現実において、類似した問題に二度と直面しないという社会はありません。どの世界も街も、あらゆる歴史、運命において、人々の色欲の対立がその中心にあるのです。どの夫婦も、まるで森が暴風に揺さぶられるようにその問題に対して揺さぶられるのであり、誰しもがそれによって洪水に見舞われた国のように飲み込まれるのです。もし私が、義務にまつわるフレーズや「許さない」という言葉をもって、それほど自然で、絶望的にひどく、明白な事態を切り抜けるのであれば、私はいったいどれほど比類のない不誠実さを背負わなければならないのでしょうか。すると、私は、突風は弱々しい木々を倒しますと言えるのでしょうか、あるいは、それは突風ではな

い、とか、はたまた突風に謝る、などと言えるのでしょうか？それとも、私は突風を非難しますと言うことができるのでしょうか？ […] できないことは明らかですね。私にできることがあります。その突風と向き合うこと、その危険さと正々堂々と戦うこと、突風をつかむこと、動かすことです。突風を前にして逃げることも隠れることもできます。とはいえ、突風を知ることはしなければなりません。その根本、要因について知ること、その実現性や見た目について知る必要があります。³⁰

二重線⑦のように、現実として受け止め、また夫の浮気を自然界の暴風や突風にまで例えている。これについても当然反論は出ただろうが、その反論に対するさらなる反論は今のところまだ見つけられていない。本稿において重要なのは、浮気の問題を現実として捉えていたことである。その意味において、ヘイズが指摘した「男の浮気と女の浮気は異なる秩序にある」というダブルスタンダードとされるものは、直面する問題の解決策を考える過程で出た現実であり、それを簡単にダブルスタンダードという言葉で片付けられるのか疑問である。また、その良し悪しの判断は、イエSENSカーから読者に委ねられていたことも指摘しておきたい。その根拠は二重線①'にある。イエSENSカー自身は、読者に自らの考えを伝えはするが、読者に対して「こうすべき」とか「こうあるべき」という何らかの行動を強いる意図は持っていなかったのである。

4. おわりに

以上、ヘイズの指摘するイエSENSカーのダブルスタンダード擁護の言説に焦点を絞って考察を行ってきた。イエSENSカーのダブルスタンダード擁護は、一見すると議論の余地はないかのように思われるが、その文脈を考えると必ずしも擁護する立場から述べていたとは言い切れない。そもそも、男女平等の話をしていないからである。イエSENSカーが直面した課題は、夫の浮気に対してどうすれば良いかというものであった。そのことをどのように捉えれば、当事者の女性だけでなく、広く女性読者にとって良い解決策を導き出せるかという点に集中して考えたなかで出てきた言説だったのである。これが、本稿の結論である。

最後に、筆者が「はじめに」で述べた、イエSENSカーのジェンダー論的位置付けに関しても少し触れておきたい。本稿で取り上げたイエSENSカーの言説を見れば、ジェンダー論的観点から見て女性解放論者ではないのは明らかであろう。母性が天職だと述べたり、女性に忍耐を強いたりしているからである。しかしながら、母になることを女性の天職とまで言ってしまうイエSENSカーであっても、だからといって彼女が保守的な立場にあったと安易にはいえない。本稿で引用した箇所だけでは、その

証明はできないが、たとえば、1926年10月の記事に以下のようなものがある。イエセンズカーが進歩的なのか保守的なのかという本格的な議論については今後また別の場で検討するが、ここでは「自立したモダンな女性である」と自認する女性たちの矛盾を突くイエセンズカーの指摘、およびそのような進歩的とされる女性と保守的な女性の両者を同時に批判している例を引用することで、本稿のまとめと今後の展望の提示としたい。

世の中はこのように回ってきましたし、遙か昔から世の中は、進歩的な層と保守的な層とに分かれてきました。と同時に、世の中は、両者が常に正しいということによって均衡が保たれてきました。私の考えでは、我々のケースにおいても——つまり、女性の自立においてですが——あらゆる社会問題や偏見は、私たち自身のなかにある保守主義として、このような役割を果たすことはないでしょう。きちんと認識してください。私たちは自分の少女のころの理想の男性像を心のなかに持っているということ。つまり、たくましく、強く、負け知らずの王子様で、その王子様はいつでもあなたの味方でいてくれて、あらゆる危険からあなたを守ってくれて、一生涯あなたが喜ぶことしかしない、一言でいえば本物のフェアバンクス³¹なのです。私たちは、自立していてモダンな女性ですが、そのように振舞える人は一人もいないのです。私たちは自らの自立性をあまりに声高に叫び、それによって衰えていくか、あるいは内にこもって自らの権利を手に入れることができないかのどちらかなのです。³²

注

- ¹ 筆者はこれまでミレナ・イエセンズカーの呼称に、名前の「ミレナ」を用いてきた。これは、彼女が様々なペンネームを用い、また二度の結婚と離婚により姓が幾度か変更になったことから、統一を図るため、本人が多く用いた名であり、また広く日本のドイツ語圏文学・文化研究者にもなじみのある「ミレナ」を呼称として用いることが最良と思われたからである。しかし本稿では、ミレナ・イエセンズカーの執筆活動に目を向けた近年の欧米の文献において「イエセンズカー」を用いることが増えてきたことを考慮し、また、彼女のプライベートな側面であるカフカとの関係に目を向けたカフカ研究の一環として取り上げられる際に用いられる「ミレナ」との差別化を図る目的から、彼女の呼称に姓の「イエセンズカー」を用いることとした。
- ² フランツ・カフカ『ミレナへの手紙』池内紀訳（白水社、2013年）42頁（大海に例える記述）および67頁（メドゥーサに例える記述）。
- ³ Kathleen Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská: A Critical Voice in Interwar Central Europe* (New York: Berghahn Books, 2003).

- 4 Wilma Abeles Iggers, *Women of Prague: Ethnic Diversity and Social Change from the Eighteenth Century to the Present* (Providence, Oxford: Berghahn Books, 1995).
- 5 Iggers. *Women of Prague*, pp. viii, 2.
- 6 Dorothea Rein, *Allest ist Leben: Feuilletons und Reportagen: 1919–1939* (Frankfurt a M.: Neue Kritik, 1984). 本書は、1990年、1996年、1999年、2008年に版を重ねている。2008年版では初版から2編入れ替わっている（41編）。
- 7 英語圏：Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská* [38編]；チェコ：Marta Marková-Kotyková, *Mýtus Milena. Milena Jesenská jinak.* (Praha: Primus, 1993) [伝記の巻末にアンソロジー掲載、11編]；Milena Jesenská. *Cesta k jednoduchosti.* Brno: Barrister & Principal, 1995. [生前に出版したものの再版、19編]；Milena Jesenská, *Zvenčí a zevnitř: Antologie textů Mileny Jesenské* (Praha: Nakladatelství Franze Kafky, 1996) [11編]；Milena Jesenská, *Nad naše síly: Češi, Židé a Němci 1937–1939.* (Olomouc: Votobia, 1997) [36編]；日本：松下たえ子編訳『ミレナ記事と手紙——カフカから遠く離れて』（みすず書房、2009年）[26編、ライン編著（ドイツ語）が底本]
- 8 Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská.*
- 9 “For Jesenská, the clearest sign of progress in fashion was the adoption of masculine styles of dress for women. Men’s clothes were, according to her, simple, elegant and practical. By dressing like men, women were claiming the freedoms that previously only men had enjoyed”. [Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská*, 10.]
- 10 “Women’s clothes restricted movement; they were awkward and Jesenská had associated awkwardness with ugliness, unnaturalness”. [Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská*, 10.]
- 11 “In this article, Jesenská made explicit the connection between the changes in fashion in accordance with the emancipation of women and the rejection of ornament in architecture: [...]”. [Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská*, 12.]
- 12 “To begin with, Jesenská argued that women had a much greater obligation to attend to their physical appearance than men did. She stated that it was easy for a woman to win a man, but to keep a man’s love a woman had to work on being attractive and pleasant. [...] For several years, she continued to argue that women had an obligation to please their husbands”. [[Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská*, 12–13.]
- 13 “This view followed from her conviction that a woman’s role was defined by her sex. [...] In ‘A Theme that has Nothing to do with Fashion’, she argued that the infidelity of a man and the infidelity of a woman were of a different order. Because a woman’s mission was to bear children, she was under an obligation to uphold the highest principles in her sexual life. In other words, Jesenská defended the double standard of sexual behaviour, which had long been attacked by supporters of equal rights for women. [...] There, she criticised women who acted like martyrs and tyrannised their families by complaining about the difficulties of maintaining a household”. [Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská*, 13.]
- 14 “By 1929, Jesenská had rejected completely the view that a woman should cater to the demands of

her husband”. [Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská*, 14]

- ¹⁵ 以下、本節におけるフェミニズム史に関する記述は、Jana Burešová, *Proměny společenského postavení českých žen v první polovině 20. století*. (Olomouc: Univerzita Palackého v Olomouci, 2001) および Jana Malínská, *Do politiky prý žena nesmí – proč?: Vzdělání a postavení žen v české společnosti v 19. a na počátku 20. století*. (Praha: Libri, 2005) を参考にまとめた。
- ¹⁶ Burešová, *Proměny společenského postavení českých žen v první polovině 20. století*, 53.
- ¹⁷ Malínská, *Do politiky prý žena nesmí*, 12.
- ¹⁸ ミネルヴァの卒業生で、大学の博士号取得者第一号は、1901年に哲学博士となったマリエ・バボロヴァー (Marie Baborová, 1877–1937) で、第二号として1902年に医学博士となったアンナ・ホンザーコヴァー (Anna Honzáková, 1875–1940) は、その後、ミネルヴァの学校医も務めた。
- ¹⁹ この仕事に至る前には、彼女より一世代上で『国民政治』 (*Národní politika*, 1883–1945) でモード記者として健筆を振っていたジャーナリスト (友人の母でもある)、オルガ・ファストロヴァー (Olga Fastrová, 1876–1965) に自らを売り込む手紙を送付したが、受け入れられなかったエピソードも残っている。Mary Hockaday, *Kafka, Love and Courage: The Life of Milena Jesenská*. (Woodstock, New York: The Overlook Press, 1995), 40.
- ²⁰ Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská*, 13.
- ²¹ “In ‘A Few Old-Fashioned Comments about Women’s Emancipation’, she stated that a woman could have all sorts of jobs but only one true calling: motherhood”. [Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská*, 13.] イェセンスカーの記事は次の注 22 で改めて引用するため、ここではあえてヘイズの著書の記述を引用している。
- ²² Milena Jesenská, „O té ženské emancipaci několik poznámek velice zaostalých“, *Národní listy* (17.2.1923): 1. 下線は引用者によるもので、ヘイズの指摘箇所を示している。注 26、27 についても同様。
- ²³ “In ‘A Theme that has Nothing to do with Fashion’, she argued that the infidelity of a man and the infidelity of a woman were of a different order”. [Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská*, 13.]
- ²⁴ “Because a woman’s mission was to bear children, she was under an obligation to uphold the highest principles in her sexual life. In other words, Jesenská defended the double standard of sexual behaviour, which had long been attacked by supporters of equal rights for women”. [Hayes, *The Journalism of Milena Jesenská*, 13.]
- ²⁵ Otázka zněla: co má počít žena, jejíž muž je nevěrný? [Milena, „Téma, které k módě nepatří“, *Národní listy*, (22.11.1923): 4]
- ²⁶ Milena, „Téma, které k módě nepatří“, 4.
- ²⁷ Milena, „Téma, které k módě nepatří“, 4.
- ²⁸ たとえば、1924年11月27日付『国民新聞』6面の「スキーへ!」においては、スポーツをするにあたっての心構えとして「パートナーに対して友達であれ」 „být druhu kamarádem“ と述べ、1926年1月14日付『国民新聞』の5面に掲載の「婦人とモダンな女性」では、モダンな女性は男性のパートナー、友人、助手にもなることができるという趣旨

のことを記しており、男女間の友人関係とは、すなわち精神的に対等な関係のことを指しているといえる。

- ²⁹ „Na svůj článek o nevěře muže (a byl to vůbec článek o nevěře?) jsem dostala mnoho dopisů poplašených žen: jakže mohu něco takového omlouvat? “ [Milena, „Od člověka k člověku,“ *Národní listy*, (12.1.1924): 1–2.]
- ³⁰ Jesenská, „Od člověka k člověku,“ 1–2.
- ³¹ 記事では明記されていないが、アメリカの映画俳優兼製作者のダグラス・フェアバンクス (Douglas Fairbanks, 1883–1939) であろう。フェアバンクスは 1915 年に映画デビューし、1919 年に喜劇俳優チャーリー・チャップリン、映画女優メリー・ピックフォード、映画監督のデヴィッド・ウォーク・グリフィスとともに映画会社《ユナイテッド・アーティスツ》を設立した。『快傑ゾロ』(1920 年)、『三銃士』(1921 年)、『ロビン・フット』(1922 年)、『バグダッドの盗賊』(1924 年) などに出演し、1920 年代には世界的な有名な活劇スターとなった。映画評論家の佐藤忠男の記述によれば、来日経験もあり、その時のエピソードから女性尊重の姿勢があったようである。(『岩波=ケンブリッジ世界人名辞典』デヴィッド・クリスタル編、岩波書店、1997 年、834 頁および『20 世紀アメリカ映画事典』畑暉男編、カタログハウス、2002 年、12–17 頁および 158–161 頁を参照。) 活劇でのたくましさと女性尊重の姿勢は、イエSENSカーが例として挙げた王子様像と一致する。また、世界的に女性ファンが多かったことから、イエSENSカーが例として挙げた理由がうかがえる。
- ³² Milena Jesenská, „Ještě ta samostatnost,“ *Národní listy*, (31.10.1926): 13.

**Milena Jesenská's View on Gender:
A Consideration Focusing on Double Standard Advocacy**

Sachiko HANDA

From the end of 1919 and into the 1920s Milena Jesenská (1896–1944) wrote articles for Czech newspapers aimed primarily at female readers. Although she was not involved in any women's rights activities, or a member of conservative group, she tended to enlighten her readers. In order to clarify her intentions and her ideological standpoint, this paper examines her view on gender by focusing on double standard advocacy that a preceding study, *The Journalism of Milena Jesenská*, discusses. To begin with, this paper establishes the brief history of the feminist movement from the 19th century until the 1920s in the Czech Lands, Jesenská's biographical information and a summary of her career. The author considers that although the movement benefited Jesenská in her youth, she does not fall under feminist ideology but that does not mean that she was closed to the conservative ideology.

In the main part, this paper examines a double standard of sexual behavior that Jesenská is said to argue; that the infidelity of a man and the infidelity of a woman were of a different order. This paper tries to reveal Jesenská's intentions and concludes that she does not intend to defend a double standard but simply tries to solve the suffering of women realistically. Jesenská argued that men and women could not be equal because of their physiological differences and compared the infidelity of a man to a natural disaster. This paper shows that since she concentrated on solving the problem, she emphasized good relationships and friendships of couples, instead of arguing about the gender equality. This paper ends with a suggestion of her position in a gender argument by citing one of her articles that criticizes both the feminist group and the conservative group.